

# 現代日本語における接頭辞「お」の 付く語の意味分類について

Meaning Classification about Nouns with Prefix O in Contemporary Japanese

村田志保

要旨：

「お荷物」「お菓子」「お箸」などのような接頭辞「お」の付く語は数多く存在し、主に敬語表現として用いられる。しかし、その用法に注目すると、相手の持ち物に対して使用する場合は尊敬語、自分の持ち物の場合は謙譲語や美化語として用いられるなどの違いがある。また美化語として使用される場合、女性語としての要素も含む場合があり、それぞれの語が様々な意味を持ち、また「お」を付ける規則も例外が多く、日本語教育の場では扱いにくい語となっている。

そこで本稿では、現代日本語を扱う国語辞典6冊から、接頭辞「お」の付く語を採取し、それぞれの語の意味を把握するという目的で、意味分類を試みた。その結果、「お」の付く語を敬語に関わる「尊敬語」「謙譲語」「丁寧・美化語」の3つと、「その他の語」に4分類することができた。また、この4つの意味分類に属する語には、「お」を付けた形で一語化している語か否かといった形態的な側面での偏りがあることがわかった。

## 1. はじめに

接頭辞「お」は「お電話」「お話」「お箸」「お水」など、名詞に冠してさまざまな意味を名詞に持たせることができる。しかしながら同じ語であっても文脈によって意味が異なることも少なくない。例えば（店員から客に向かって）「お箸をお取りしましょうか。」と言えば、動作主は話し手であり、相手に向ける箸であるため謙譲語内であっても尊敬語的な用法と判断できる。「箸」を忘れた上司に対し、「私のお箸をお使いになりますか。」のように動作主は話し手ではなく相手である「上司」となるが、話し手の持ち物である場合は謙譲や丁寧な用法とも判断できる。また（箸を忘れた後輩に対し）「私のお箸でよかったら使って。」のように動作主は後輩であっても、「お」を付けて丁寧に述べることもできる。また（小さい子どもに向かって）「お手々ふいた？」など敬語とは関係なく使用できる語もある。このように形はすべて同じでありながら、話し手の待遇意識によってさまざまな使い方ができる。

接頭辞「お」の使用に大きく関わる相手への「配慮」とは、敬語表現のみならず、親愛表現、ぞんざいな表現等も含め、「コミュニケーションにおける言語使用を背後で支える各種の意識や心配りを表す語」（国立国語研究所2006：2）であると定義し、狭い意味の敬語だけでなく待遇意識などもここに含めることができる。つまり「配慮」とは、敬語に限らずどの意味を持つ語にも存在しうるものである。例えば「手」に対して「お手々」、「ませていること」を「おしゃま」などと「お」を付け大人から子供を対象に述べる言葉がある。これを幼児語と言う。子供に対して

という点では人間関係に配慮して述べるのだが、敬語のように、相手を立てるような待遇意識や対人行動上の志向性を持たないという点で、敬意を含む表現ではないと考えられる。

以上の点から、本稿では、配慮に関わる接頭辞「お」の働きとして、「敬語」か、それ以外かを区別して考察していく。なお、考察外としたいのは、「お」を付ける規則である。一般的に、語種で区別され、「お」は和語、「ご」は漢語に付くと説明されることが多いが、例外も多い。本稿ではこのような規則に言及するのではなく、現代日本語において語彙化している「お」の付く言葉を取り上げ、意味によって分類することを目的としている。

## 2. 先行研究と調査方法

### 2.1 先行研究

接頭辞「お」は敬語に大きく関わるため、まずは敬語の用法を確認しておく。

菊地（1997）では、敬語を次のように分類し説明されている。

尊敬語 … 話手が主語を高める表現である。

謙讓語A … 話手が補語を高め、主語と低める（補語よりも低く位置づける）表現である。

謙讓語B … 話手が主語を低める（ニュートラルよりも《下》に待遇する）表現である。

丁寧語 … 話手が（同じ内容を）聞き手に対して丁寧に述べる表現である。

美化語 … 話手が（同じ内容を）きれいに／上品に述べる表現である。

「尊敬語」と「謙讓語A」に共通するのは話し手からみて「相手側又は第三者」対して対人関係を意識することであり、「謙讓語B」「美化語」「丁寧語」は「聞き手」にどう表現するかということである。「美化語」は「丁寧語」と同様、対人関係を意識しないで使用できるが、話し手は相手に上品に見せるために述べることができる。しかし「お手々を洗おう」などといった幼児に向かって述べる「お外」や「お手々」も上品さを見せる美化語としてよいだろうか。主婦同士が「うちのお台所も古くなってきたから。」と述べる「お台所」と「お手々」を同等に扱ってよいだろうか。

菊地（1997）では、美化語を「菓子」に対する「お菓子」、「花」に対する「お花」など「上品」という待遇的意味を持つものとしてとらえておくと述べられている。宮地（1999）では、美化語は「言葉づかいの品位への配慮をあらわす敬語」、尾崎（2009）においても話し手の上品さを見せる語であると説明されている。これらは敬意というよりはむしろ話し手の上品さや品位を保つという点で、尊敬語、謙讓語と区別していることがわかる。

また佐竹・西尾（2005）では、美化語の形式は「お／ご+名詞」のみで、話し手自身の言葉を上品にするために使うと述べており、「お間抜け」や「ご大層」、「おめでたい（人）」などといった皮肉や嘲笑をあらわす言葉は美化語の「お／ご」を付けないとしている。したがって、美化語のような「お+名詞」の形を持ちながら、意味によっては美化語ではない語も多く見られることを認めている。

そこで本稿では、敬語として「尊敬語」「謙讓語」「美化語」と、敬語以外の語という分類で考えていきたい。

## 2.2 調査方法

本稿では6冊の国語辞典を基に、現代語で知っておくべき接頭辞「お」の付く語を採取し、意味的な側面で分類を試みる。それらの意味記述に基づき分類項目を設定し、採取した語を整理する。ここで述べる意味記述とは、それぞれの辞書で見出し語を説明するために記述された文章を指す。例えば「お達し」の場合、「役所や目上の人からの知らせや言いつけをていねいに言ったことば。」(『三国』)と説明されている。この記述を意味記述と呼ぶ。この記述に「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」「美化語」と記載のあるものはそれぞれに分類し、「お達し」のように敬語分類の記載のない場合には、「目上から」と記述のあるものには「尊敬語」、このような人間関係の記載のなく「丁寧に」だけ記述のあるものには「丁寧語」と判断した。また敬語以外の語で、「幼児語」、「俗語」、「女房詞」、「親愛」、「親しみ」などと記述のある語もそれぞれの分類を行った。

さらに注目したいのは、語の形態的側面である。語によっては「お蔭」「おにぎり」のように「お」をとると「蔭」「にぎり」となり、もとの意味をなくしてしまう語や、「おやつ」が「やつ」というように意味を持たなくなる語がある。これを「一語化」と呼ぶ。それに対し「お疲れ」であれば、意味記述で「「疲れ」の尊敬語」(『三省堂国語辞典』)というように「お」を付けなくても「疲れ」のみで意味が通り、「お」を付けることで尊敬語を表すことのできる語がある。これら二つの側面を考慮し、「お」の付く語を「一語化した語」と「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」に分類する。その語数の集計から分類項目ごとの語数の偏りを見る。記述によっては「尊敬・美化」と説明のある語もあり、それについては述べ語数で扱っていく。

表記については、どの辞書も漢字表記の「御」、ひらがな表記の「お」の2種類を併用しているが、辞書ごとに語による表記が異なるため、本稿ではすべてひらがな表記の「お」で統一することにした。

## 3. 調査結果

### 3.1 国語辞典からの採取

国語辞典の選定に関しては、接頭辞「お」の性質に合わせ敬語分類を明記していること、現代語を多く取り扱っていることを条件に『集英社国語辞典第3版』(以下、『集英社』)『三省堂国語辞典第7版』(以下、『三国』)『岩波国語辞典第7版』(以下、『岩波』)『明鏡国語辞典第2版』(以下、『明鏡』)『学研現代新国語辞典改訂第5版』(以下、『学研』)『明治書院精選国語辞典新訂版』(以下、『明治』)を利用し、接頭辞「お」を冠すと判断した語を採取した。また『日本国語大辞典第2版』は現代語以外にも多く含まれているため、本稿では考察外とする。またいわゆる百科事典的な要素を含む『広辞苑』『大辞泉』『日本語大辞典』などや、小学生、中学生を対象とした学習国語辞典なども考察外とした。また品詞は名詞のみとし、形容詞(「お寒い」)、感動詞(「おめでとう」など)、慣用句(「お目にかかる」など)、接続詞(「おまけに」)は考察外とする。

それぞれの収録語数と接頭辞「お」の付く語の収録語数、それぞれの辞典で明記されている敬語分類を以下の表1にまとめている。

表1 収録語数の比較と敬語分類表記

	収録語数(語・項目)	接頭辞「お」の付く語	敬語分類
集英社	約92,000語	約310語	尊敬、謙讓、丁寧
三国	約82,000語	約400語	尊敬、謙讓、丁寧、美化、丁寧
学研	約75,600語	約280語	尊敬、謙讓、丁寧
明鏡	約70,000項目	約280語	尊敬、謙讓、丁寧、美化、丁寧
岩波	約65,000語	約300語	尊敬、謙讓、丁寧
明治	約50,000項目	約120語	尊敬、謙讓、丁寧

現代語のなかでも『三国』で「お」の付く語が多くなっていることがわかる。また5分類を採用している辞書は『三国』と『明鏡』のみであり、他の辞書では3分類であることがわかる。「尊敬」「謙讓」についてはどの辞典でも分類されているが、「丁寧」「美化」「丁寧」については辞書によって扱いが異なっている。

### 3.2 国語辞典における接頭辞「お」の意味記述について

前章で敬語のそれぞれの分類について見てきたが、接頭辞「お」は敬語の何に関わるのだろうか。「お～になる」「お～する」の形からもわかるように、尊敬語だけでなく謙讓語にも関わり、さらには「お箸」などの美化語にも関わっている。

ここでは各辞書においてどのような意味で説明されているのかについて、整理しておきたい。ここでは動詞、形容詞、形容動詞に関わる説明を省き、敬語5分類を採用している『明鏡』、3分類を採用している『集英社』から取り上げ、整理したものが表2である。

表2 接頭辞「お」の意味記述

明鏡	<ul style="list-style-type: none"> <li>①尊敬 Aに関係する事物・状態や、Aが行う動作について、Aを高める。</li> <li>②謙讓 Aに差し向ける事物や、Aに及ぶ動作について、Aを高める。</li> <li>③美化語 美しく上品な言い方をすることで、自分の品位を高める。いろいろな物事について言う。</li> <li>④《「お…様」「お…さん」の形で、他人の状態を表す語を入れて》他人に対するねぎらい・慰めの気持ちを表す。</li> <li>⑤《人を表す語の上に付いて》軽い尊敬・親愛の気持ちを表す。</li> <li>⑥からかいや自嘲、ふざけの意を表す。</li> <li>⑦本来の敬意が失われて、形式的に添える語。</li> </ul>
集英社	<ul style="list-style-type: none"> <li>①(相手に属するものに付いて)相手への敬意を表す語。</li> <li>②(相手に対する自分の行為に付いて)相手への尊敬を表す語。</li> <li>③(体言について)丁寧の意を表す語。</li> <li>④(女性の名前に付いて)尊敬・親愛の気持ちを表す語。</li> </ul>

『明鏡』では、「尊敬」「謙讓」「美化語」と敬語分類を基本とした説明に、「ねぎらい・慰め」「軽い尊敬・親愛」「からかい・自嘲・ふざけ」「形式的に添える語」などが補足されている。『集英社』では、「敬意」「尊敬」「丁寧」「尊敬・親愛」は説明されているが、「謙讓」については言及はない。この2冊を統合すると、接頭辞「お」は敬語分類の「尊敬」「謙讓」「丁寧」「美化語」に加え、「親愛」「敬意」「からかい・自嘲・ふざけ」の意味を持つことがわかった。

それぞれの用法について見てみると、「尊敬」は「Aが行う動作について」、「謙譲」は「Aに及ぶ動作」（『明鏡』）で、「尊敬」は「動作主」、「謙譲」は動作の及ぶ相手に関することがわかる。「丁寧」や「美化語」は文法的な記述はなく、「ものごとに付く」や「体言に付いて」とどちらも人に関わる記述はなく、名詞に付くという点で一致している。そこで本稿では「丁寧語」と「美化語」はひとつの分類としてまとめていく。

また敬語以外に「お」を付けて一語化している語には、「お祭り」「お神輿」「お神酒」など神仏祭礼に関する語や、「お冷や」「おかず」「お浸し」などの「女房詞」、それ以外に「お節」「お好み焼き」など「料理」に関する語、「おもらし」などの「幼児語」も見つかっている。「女房詞」とは天皇や貴人に給仕する女房たちが食べ物の名前を直接言うことを避け、不快感や不潔感を婉曲的に表したのがはじまりである。

これらの意味記述から、接頭辞「お」は敬語に関わる「尊敬」「謙譲」「丁寧・美化語」と、敬語に関わらない「親愛」「からかい・自嘲・ふざけ」や「女性語」と呼ばれる語もあることがわかった。「女性語」に関しては、記述に「女房詞」「もと女房詞」「女性語」と記述のある語を含める。またその語のなかには、「お」を付けた形で一語化し意味を持っている語も中には多いことがわかった。その区別も併せて提示していく。

### 3.3 敬語に関わる「お」の付く語

#### 3.3.1 「尊敬語」に関する接頭辞「お」の付く語

『集英社』『三国』『岩波』『明鏡』『学研』『明治』の国語辞典より、それらの意味記述に「尊敬語」「尊敬」「敬って」「敬意」「敬称」と意味記述のある語は「相手を高める」とみなし「尊敬」として分類した。

#### <「尊敬語」を表す「お」の付く語> (123語)

お家、お家様、お出で、お稲荷さん、お祝い、お歌、お歌所、お母様、お母さん、お蚕、お帰り、お神楽、お隠れ、お方、お構い、お上、お客、お客様、お髪、お国、お声掛かり、お子様、お腰、お骨、お言葉、お好み、お先、お座敷、お里、お爺さん・お祖父さん、お七夜、お釈迦様、お酌、お邪魔、おしょさん、お嬢様、お嬢さん、お上手、お勤め、お世話、お祖師様、お側、お母様たあさま、お題目、お宅、お立ち、お旅所、お霊屋、お為、お使い、お疲れ、お付、お次、お勤め、お手、お手の筋、お出座し、お手元、お手元金・お手許金、お寺様、お寺さん、お父様、お父さん、お伽、お得意、お所、お年、お友達、お酉様、お直り、お流れ、お情け、お馴染み、お成り、お似合い、お兄さん、お似まし、お荷物、お姉さん、お歯ひめさま、お婆さん・お祖母さん、お羽車、お運び、お話、お払い、お姫様ひめさま、お日様、お膝下、お姫様、お拾い、お部屋様、お遍路、お坊さん、お坊ちゃま、お盆、お前、お座し、お待ちかね、お祭り、お身、お見え、お神輿、お見逸れ、お宮、お向かい、お目、お眼鏡、お召し、お召し替え、お召し物、お召し列車、お目玉、おめでた、お目見得もうさま、お父様、お持たせ、お持ち帰り、お物、お役御免、お休み、お呼び、お礼、お歴

このなかには、人を表す語、その人の身体部位、動作に関わる語、持ちもの、場所、乗り物に関する語や神仏に関する語が以下のように採取された。

「身体部位」…お髪、お手、お歯、お目、お身、お手元

「属性」…お得意

「衣類」…お腰、お眼鏡、お召し、お召し物

「親族」…お母様、お母さん、お子様、お爺さん、お祖父さん、お嬢様、お嬢さん、  
お母<sup>たあ</sup>様、お父<sup>もうさま</sup>様、お父さん、お兄さん、お姉さん、お坊ちゃま、お父様

「作品」…お歌

「その他」…お荷物、お手元金、お召し列車

「その他」にもあるように、その人が手に持つ分離できる「荷物」、乗り物などにも「お」を付けて尊敬の意を持たせることができることがわかった。

「尊敬」を表す語のなかには「一語化している語」と「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」が混在している。それらは、辞書の意味記述において、「お手」を「手の尊敬語」、「お年」を「年の尊敬語」を説明されている語は「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」と判断し、それ以外の語については「お」を付けた形で一語化している語と見なす。

<「尊敬」を表す、一語化した語> (49語)

お家様、お出で、お稲荷さん、お歌所、お母様、お隠れ、お上、お七夜、お釈迦様、お嬢様、お勧め、お宅、お立ち、お霊屋、お為、お使い、お疲れ、お付、お寺様、お寺さん、お酉様、お直り、お流れ、お成り、お似合い、お似まし、お羽車、お運び、お払い、お日様、お膝元、お拾い、お部屋様、お遍路、お前、お座し、お待ちかね、お見逸れ、お召し、お召し替え、お召し物、お召し列車、おめでた、お目見得、お父<sup>もうさま</sup>様、お持たせ、お役御免、お呼び、お歴歴

「尊敬」を表す「お」の付く語は全体で123語、「一語化している語」は49語、「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」は74語という結果が得られた。

### 3.3.2 「謙譲」に関する接頭辞「お」の付く語

謙譲語は、文化庁(2010)では「自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。」と説明のあるように、ここでも相手に関するものや動作を表す言葉がほとんどである。ここでは辞書に「謙譲」「謙譲語」「へりくだる」と意味記述のある語の採取を行った。

<「謙譲」を表す「お」の付く語> (22語)

お祝い、お鏡、お構い、お口汚し、お酌、お邪魔、お勧め、お世話、お供え、お粗末、お伽、お願ひ、お払い、お袋、お披露目、お見逸れ、お目見得、お目文字、お呼ばれ、お呼び立て、お礼、お詫び

「謙譲」を表す「お」の付く語は全体で22語、「一語化している語」は10語(お鏡、お口汚し、お払い、お袋、お披露目、お見逸れ、お目見得、お目文字、お呼ばれ、お呼び立て)、「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」は12語という結果が得られた。

### 3.3.3 「丁寧と美化語」に関する接頭辞「お」の付く語

接頭辞「お」は美化語であると説明されることが多い理由は、「お」の付く語の総数がそれぞれの辞書の約3分の1を占めているからであろう。なお『明鏡』では、「丁寧」と「美化語」が一部別になっている語もあるが、「丁寧語」として扱われている語は「お祝い」「お方」「おめでた」「お休み」の4語のみである。

それぞれの辞書から「丁寧・美化語」「丁寧に述べる」と意味記述のある語、『岩波』に関しては「丁寧表現」と記述のある語の採取を行った。

#### <「丁寧・美化語」を表す「お」の付く語> (150語)

お愛想、お稲荷さん、お祝い、お薄、お歌、お蚕、お鏡、お欠き、お神楽、お方、お金、お釜、お構い、お上さん、お爛、お気に入り、お客、お灸、お経、お髪、お国、お香香、お香料、お骨、お好み、お座、お菜、お先、お座敷、お札、お里、お三時、お仕置き、お辞儀、お仕着せ、お下地、お七夜、お忍び、お仕舞、お湿り、お下、お酌、お重、お上手、お新香、お勤め、お澄まし、お相撲、お歳暮、お世辞、お世話、お供え、お側、お粗末、お揃い、お代、お題目、お互い、お宝、お談義、お団子、お茶、お茶請け、お茶会、お中元、お銚子、お猪口、お次、お作り、お付け、お勤め、お摘み、お通夜、お汁、お釣り、お手、お手洗い、お出入り、お出掛け、おでき、おでこ、お手伝い、お手前、お天気、お伽、お得意、お年、お屠蘇、お泊まり、お友達、お酉様、お取り寄せ、お腹、お馴染み、お鍋、お涙、お納戸、お似合い、お握り、お荷物、お願い、お鉢、お初、お初穂、お花、お花畑、お囃子、お払い、お針、お日柄、お髭、お浸し、お櫃、お昼、お披露目、お布施、お札、お古、お弁当、お遍路、お盆、お任せ、お待ちかね、お祭り、お祭り騒ぎ、お味御付け、お神輿、お水、お見舞い、お耳、お土産、お迎え、お婿さん、お結び、お襦袢、お目当て、おめかし、お眼鏡、おめでた、お持ち帰り、お守り、お役、お約束、お休み、お呼ばれ、お呼び立て、お嫁さん、お礼、お詫び、お椀

「丁寧・美化語」を表す「お」の付く語は全体で150語、「一語化している語」は12語（お鏡、お欠き、お構い、お髪、お腰、お忍び、お湿り、お作り、お付け、お摘み、おでき、お酉様）、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は138語という結果が得られた。

## 3.4 敬語に関わらない語

### 3.4.1 「親愛」「女性語」「幼児語」「俗語」に関する接頭辞「お」の付く語

「親愛」を表す語については、「人を表す語」については意味のなかで「親しみ」という記述が見られ、これらが「親愛」を表す語であると判断できる。特に「様」に対して「さん」を付ける親称語彙に多く見られた。

#### <「親愛」を表す「お」の付く語> (17語)

お出で、お母さん、お上さん、お爺さん・お祖父さん、お嬢さん、お天道様、お父さん、お兄さん、お姉、お姉さん、お婆さん・お祖母さん、おばか、お日様、お雛様、お袋、お坊ちゃん、お巡りさん

「お上さん」については、妻を表す語で「上さん」があるものの、「お」を付けると意味の幅が広がるため、配慮差とはみなさないこととする。「親愛」を表す「お」の付く語は全体で17語、「一語化している語」は9語（お出で、お上さん、お嬢さん、お天道様、お姉、お日様、お雛様、お袋、お巡りさん）、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は8語という結果を得られた。

「女性語」とは、古くは女房詞に由来するものである。ここでは各辞書の意味記述に「女性語」「女房詞」という、キーワードがあるものを採取している。また「おかか」「お数」「お強」「おなか」「おつむ」「お冷や」「御拾い」「お襦袢」「お目文字」は「もと女房詞」と記述されていたものもあったが、女房詞由来としてここに記載しておく。

#### <「女性語」を表す「お」の付く語> (46語)

おかか、お鏡、お欠、お数、おかちん、お焦げ、お腰、おこた、お薦、お強、お薩、おざぶ、お澄まし、お三時、お下地、お酌、おじや、お湿り、お喋り、お重、お新香、お玉、お月様、お作り、お付け、おつむ、お手塩、おでん、お通し、お熱、お中・お腹、おなら、お願ひ、お萩、お菌黒、お跳ね、お針、お日様、お浸し、お冷や、お平、おふう、お拾い、お星様、お襦袢、お目文字

「女性語」を表す「お」の付く語は全体で46語、「一語化している語」は2語（「お熱」「お酌」）、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は44語という結果が得られた。

これらの形態的な特徴として、「お焦げ」「お喋り」「お冷や」「お澄まし」「お付け」「お湿り」「お作り」など動詞の連用形に「お」を付けた語、「おかか」「お下地」など全く他の語を言い換えた語、「おざぶ」「お薩」「お鏡」「お欠」「お重」など「お」を付けもとのことばを省略した語が見られる。中には一語化していない「お熱」「お酌」も見られるが、その他はすべて一語化している。

その他「料理」に関する語として「お握り」「お好み焼き」「お結び」「おみおつけ」「お焼き」が見られた。「お菜」は『明鏡』だけ見出し語として見られたが、美化語として記述されているため、ここでは女性語として扱わなかった。

そのほか、「幼児語」と「俗語」を以下に記載しておく。

#### <「幼児語」を表す「お」の付く語> (19語)

おいた、お絵描き、お三時、おしゃま、おちんちん、お月様、おつむ、お手々、おねしょ、お眠、お化け、お日様、おふう、お星様、お土産、お漏らし、お目ざ、お目々、お漏らし

#### <「俗語」を表す「お」の付く語> (45語)

お足、おいた、お蚤、お嬢・お母、お神楽、お冠、お欠き、お気に入り、お蔵入り、お子様、お釈迦、おしゃま、お邪魔虫、おじゃん、お受験、お揃い、お宝、お宅、お立ち台、お陀仏、お玉杓子、おたんこなす、おたんちん、おちゃっぴい、お茶の子、お月様、お局、お手玉、お手付き、お泊まり、お直し、おなら、お荷物、お姉、お脳、お上りさん、お引き摺り、お披露目、お巡り、おまんま、お神酒、お宮、お目見え泥、お約束、お礼参り



「幼児語」「俗語」とはその一語で意味を持つ語であり、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は見つかっていない。しかし「お釜」のように、「お」を付けるかつかないかによる配慮的な意味も含むが、意味記述に俗語の意味として「尻」「男色」と記述されており、配慮とは関係なしに使用できるともされている。従って2つの意味を持つと解釈できる。また「お荷物」も「(他人の)荷物」の尊敬語、美化語」という意味と「負担になっている物や人。やっかいもの。」という意味を持っている。後者の場合は「お」の取り外しがなく、一語化で意味を持っている俗語である。

### 3.4.2 その他の「お」の付く語

ここでは特に意味記述にあった「からかい・自嘲・ふざけ」を、話し手自身について表せるかを確認し、敬語表現とどのように異なるのかその記述の内容を考察していきたい。それぞれの意味記述に「からかい・自嘲・ふざけ」のキーワードが見られる語はそのまま採取し、その他の意味を持つ語なども提示していく。

「非難」と記述されている「お役所仕事」や、「自分の利益を図る」と記述されている「お為ごかし」、「機嫌の悪いこと」と記述されている「お冠」とどう異なるのかそれぞれの辞書の意味記述を基に考えていきたい。

#### 「お役所仕事」

『集英社』…「形式的で融通が利かず、時間のかかる仕事のやり方。役所の仕事ぶりを皮肉ってという語」

『学研』…「形式を重視し、能率の悪い官庁の仕事。皮肉ってという語。」

『明鏡』…「形式的で、不親切・非能率になりやすい仕事ぶりを非難してという語。」

どの意味記述においても、「敬語」のような「高める」「へりくだる」「丁寧に述べる」という意は含まれず、人間関係の制限もない。相手ではなく話し手についても述べられる語である。

「お調子者」も「敬語」以外の意味を含む点で同様である。

#### 「お調子者」

『岩波』…「①いい加減に調子を合わせる人。②軽はずみでうわついた事をする人。」

『三国』…「調子に乗りやすい人。」

『集英社』…「軽はずみでいい加減に調子を合わせる人。軽率で浮薄な人。」

『学研』…「①いいかげんに調子を合わせる、信用できない人。②軽はずみで、調子にのりやすい人。」

『明鏡』…「→調子者。」

「調子者…すぐ調子にのって軽はずみなことをする人。また、すぐに相手と調子を合わせていい加減なことをする人。」

『明治』…「①軽はずみで、調子に乗って浮ついたことをする人。おっちょこちょい。②いい加減に調子を合わせる人。調子者。」

『三国』 以外は、「いい加減」「軽はずみ」「信用できない」「軽率」などといった、「お調子者」の「人」をからかうような言葉であることがわかる。この語についても敬語のような人間関係についての制限もなく、話し手についても述べられる語である。

また「お為ごかし」「お手盛り」のように「皮肉」や「非難」で意味記述されず、話し手に「利益」が与えられる意味を表す言葉も見られる。

#### 「お為ごかし」

『岩波』 …人のためにするように見せて実は自分の利益を図ること。

『学研』 …相手の利益をはかるように見せかけて、裏では自分の利益をたくらむこと。

『三国』 …人のためにするように見せて、実は自分の利益を図ること。

『明治』 …表面は他人のためにするように見せかけて、実は自分の利益を図ること。

#### 「お手盛り」

『岩波』 …自分の都合なように自分でとりはからうこと。

『学研』 …①自分が食べるために、自分で食べ物を器に盛ること。

②自分に都合のいいように、自分で勝手にとりはからうこと。

『三国』 …自分につごうのいいように取りはからうこと。

『集英』 …①自分で食べ物を食器に盛ること。

②自分に都合のいいように、自分で取り計らうこと。

『明鏡』 …自分に都合のいいように勝手に取り計らうこと。

『明治』 …（自分で食器に食物を盛ることから）自分の利益になるように自分で取り計らうこと。

これらには「皮肉」や「非難」などといったキーワードは含まれないものの、「自分の都合のいいように取り計らう」とすれば、自分の動作を自分の都合に合わせるという点で動作主の動作を相手に向ける謙譲語とは異なる。また人間関係の制限もなく、話し手や相手に対しても使用できる語である。

また人の「怒り」を描写する「お冠」と何が異なるのであろうか。「お冠」について、どのような意味が記述されているのか見ていきたい。

#### 「お冠」

『岩波』 …不機嫌なこと。怒っていること。

『学研』 …怒って機嫌の悪いこと。ふきげん。

『三国』 …きげんの悪いこと。

『集英社』 …機嫌が悪いこと。怒っていること。

『明鏡』 …怒ってきげんが悪いこと。なきげん。

『明治』 …（形動）怒っているさま。不機嫌な様子。

これらの意味記述においては、「お為ごかし」や「お手盛り」とは異なり、相手が「怒る」「不

機嫌」といった人の描写であるため、相手に使用する場合は「尊敬」とも判断できる。しかしこれらの意味記述には人間関係は明記おらず、話し手自身にも使用できると判断してよいだろう。

<その他に関する語>

お偉方、お薩、お座なり、お定まり、お為、お為顔、お為ごかし、お為筋、お調子者、お手盛り、お天気屋、お慰み、お馴染み、お荷物、お上りさん、お引き摺り、おべんちゃら、お役所仕事

ここで一語化していない語は「お荷物」のみで、他はすべて一語化している。敬語に関わらないその他の「お」の付く語は全体で146語、「一語化している語」は143語、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は3語という結果を得られた。

3.5 まとめ

6冊の国語辞典を基に、接頭辞「お」の付く語を採取し、分類を試みた。その結果、接頭辞「お」は敬語に関わる語であるという認識を持たれることが多いが、それだけでなく敬語に関わらない語もあることがわかった。また敬語に関わるものも、「尊敬」「謙譲」「丁寧・美化語」に分類される。つまり、接頭辞「お」の付く語は、「尊敬」「謙譲」「丁寧・美化語」「敬語に関わらない語」の4種に意味分類される。

さらに、それぞれの語を一語化した語と「お」を取り外して「配慮差」を出す語に注目して分けた場合、表3が示すように、その数は意味分類別に偏りがあることもわかった。

表3 接頭辞「お」の付く語意味分類別語数集計

	尊敬語	謙譲語	丁寧・美化語	敬語に関わらない語
一語化している語	49語 (約40%)	10語 (約45%)	12語 (約8%)	143語 (約95%)
接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語	74語 (約60%)	12語 (約55%)	138語 (約92%)	6語 (約5%)
合計	123語	22語	150語	151語

分類別に見ると、合計数として述べ語数の多いのは「丁寧・美化語」となっており、やはり接頭辞「お」の付く語は「丁寧・美化語」というイメージが大きいのも理解できる。「配慮差」は敬語に関われば語数も多くなると推測できるが、実際には「尊敬語」「謙譲語」において「一語化している語」も40%と半数近い数を占めている。

一語化している語の数を意味項目別に見てみると、以下のような傾向が見られた。

【一語化している意味項目別】

敬語に関わらない語 > 謙譲語 > 尊敬語 > 丁寧・美化語

「敬語に関わらない語」はほぼ一語化されており、「謙譲語」も全体の約半分ほどは一語化され

ている。しかし「謙讓語」は全体の合計数が他に比べ極端に少なくなっているため、他の分類項目と比較するには不十分である。「丁寧・美化語」と「敬語に関わらない語」については「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」の数は90%以上となっており、敬語としての要素は少ないと言える。

#### 4. おわりに

本稿では、意味分類を目的として、現代語に限って「お」の付く語の採取を行った。古語を扱う辞書にも記載があるように、古くは平安時代より使用している語も多く残されているので、古語の考察を進めると、「お」の付く規則なども見えてくる可能性がある。語種の規則として和語は「お」とされているが、規則外が多く、あまり役に立たない。そこに言及するには、なぜその規則が設定されるようになったのかという古語を探る必要があると思われる。

日本語教育においては、接頭辞「お」は配慮表現や敬意的な表現として積極的に取り入れられていないのが現状である。なぜなら規則化されておらず、語によっても用法が重なり、あまり生産性のないことが理由として考えられる。しかし、実際の会話では使用されることも多く、配慮や敬意を表す上でも適切に用いる必要がある。今後は日本語教育においても学習項目の一つとして取り入れられるよう、使用場面や対人関係においても敬語と比較しながら考察を進めていきたい。

#### 【参考文献】

- 尾崎喜光 (2009) 『しくみで学ぶ！正しい敬語』 ぎょうせい  
菊地康人 (1997) 『敬語』 講談社学術文庫  
国立国語研究所 (2006) 『国立国語研究所報告123 言語行動における「配慮」の諸相』 くろしお出版  
佐竹秀雄・西尾玲見 (2005) 『日本語を知る・磨く敬語の教科書』 ベル出版  
文化庁 (2010) 「敬語の指針」  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai\\_6/pdf/keigo\\_tousin.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf)  
塙保己一 (1932) 『群書類従 第二十七輯 雑部』 続群書類従完成会  
宮地裕 (1999) 『敬語・慣用句表現論—現代語の文法と表現の研究 (二)』 明治書院

#### 【国語辞典】

- 北原保雄 編『明鏡国語辞典 第2版』 (2011) 大修館書店  
金田一春彦・金田一秀穂 編『学研現代新国語辞典 改訂第5版』 (2016) 学研  
見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大 編 第二十八『三省堂国語辞典 第7版 小型版』 (2014) 三省堂  
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 編『岩波国語辞典 第7版新版』 (2016) 岩波書店  
宮地裕・甲斐睦郎 監修 山下杉雄・村上公雄・塩谷善之・大西匡輔 編『精選国語辞典 新訂版』 (2010) 明治書院  
森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一 編『集英社 第3版国語辞典』 (2013) 集英社